

# 日本声楽発声学会

学会通信 第44号

2020年9月発行

会員の皆さまへ

◇ 川上 勝功 会長、声楽家 合唱指揮者

学会通信第44号をお届けいたします。

昨年6月に永井和子前会長の後を担い、今の理事会の陣容でスタートしましてから1年少々経ちました。米山元理事長亡き後、学会は大変不幸な時を過ごしました。しかし、その後の永井前会長のご努力によって、ようやく3年かけて、学会としての姿を取り戻すことができました。何度も同じことを言っていると思われる方も多々おられると思いますが、米山元理事長から引き継いでやらねばならないことが、山積して残されているからです。

皆さまご存知のように、我が日本は、西洋の音楽の歴史に比して、まず出発点で大きく出遅れてしまいました。歴史の本の教えによれば、全く大雑把な表現になりますが、織田信長の頃には、ポルトガルやスペインからもたらされた西洋音楽（当時はルネサンス時代）が日本でも演奏されていた記録が見つかっております。何ともロマンティックな史実があった訳ですが、キリスト教の布教を心から怖れた豊臣秀吉らによって追放され、やがて徳川家康に至って約250年間もの鎖国に繋がって行ったということです。つまり歴史的に大きく出遅れてしまいました。以来、明治初期に学校教育の為に音楽教育法も導入されましたが、たかだか150年足らずの間に、当時の文明開化の混沌たる政治情勢の中で、大きな世界戦争にも巻き込まれ、「声楽指導」に関するような専門機関などの設立は、程遠いところにあったと推察されます。

これらの日本の西洋音楽に於ける正しい歴史を、専門家をお招きして、会員の皆さまと一緒に勉強する機会が持てたなら、たいへん喜ばしいことと思っております。

さて、前置きがだいぶ長くなってしまいましたが、今期はとうとうコロナ禍に振り回されて、5月例会、8月夏季研修会、11月例会と学会のイベントは全て流れてしまいました。来年の5月例会の開催も、今の世の中の様相では全く予測すらできません。ただ幸いなことに、世界中で競うように研究開発が進んでいる、新型コロナウイルスに対するワクチンや薬が、来年の年明け頃から我々の手に入るような様子なので、もしかしたら、5月には例会・総会を開催できるのではないかと秘かに期待をしているところです。その為の準備はこれから粛々と進めて参ります。

今後は、時代にのっとり、インターネットを利用した配信方法で、発声に関する基礎知識を、私たち理事も含めて、会員全員が共通理解と共通認識を持てるように、サイエンス部門の担当の先生方にプログラムを用意していただこうと思っております。理事の先生方は、皆さんがお忙しい方々ばかりですので、その準備がいつ整うか、ここでは詳細を明らかにできませんが、担当理事の先生と相談し進めているところです。

インターネットをご覧になれない方にはDVDを作成して配布することが可能かどうか検討して参りたいと考えております。いずれにしろ、この方法を取るとすれば、皆さまのパソコンやスマホ等のアドレスを登録していただくことになると思います。現在は110件位登録されているということです。どのような形式になるのかは、追ってまた皆さまにお知らせいたします。ちなみに、理論部門の科学者は、竹田、三枝、西浦、田中の各理事の先生方です。しっかりと「発声の原理」を学びたいと思います。そして次に活動を開始していただきたいのは教育部門の先生方です。学会の長い歴史の中で、米山先生が特に力を入れておら

れた、子供達の為の発声教育に関する研究です。勿論、子供達に発声を教える先生（これから教員になる方々）に対する指導も含めて、数多くの研究会や勉強会、はたまた国際的なシンポジウム等を行って参りました。それらを永井前会長が膨大な資料と向き合って、ようやくまとめて下さいました。

その資料を元に、更に他の資料も私のところに沢山揃っておりますので、教育部門の、池田、鈴木、河合、森井の各理事の先生方に、学会としての資料を、出来れば一冊の本としてまとめ、作成していただきたいと思っております。これも日本の音楽教育の歴史を知る大きな財産となって行くことと思います。

まだお知らせしたいことが多々あるのですが、次号に譲ることといたします。

最後になりましたが、1日も早くコロナ騒ぎが収まり、皆さまと共に、笑顔で例会に集えることを願っております。どうぞお会いできる日が来るまで、お元気でいらして下さい。

---

◇ 佐々木 正利 副会長. 岩手大学名誉教授  
声楽家 指揮者

『鶏が先か、卵が先か！？（歌唱の場合）』

あれは藝大4年の7月のこと、声楽の前期試験で歌い終えた私のところに、1級先輩で、後に38才で早逝された山路芳久さんが来られてこう仰られました。「佐々木、お前の歌は素晴らしかったけど、お前、発声で悩んでないか？ 実はな、この6月にドイツから帰国されたバリバリの発声指導者がいるんだが、よかったら紹介してやってもいいぞ」と。このお誘いは私には渡りに船。当時の私は、歌うに喉が詰まって苦しいし、思うようにブレスも入らず、声量も今一步、何よりも高音が出ないテナーだったのですから。

この先生、当学会の理事も務められた森明彦先生（昨年ご逝去）で、F. フースラーの直弟子 T. リンデンバウム先生のもとで研鑽を積まれたとのことで、藝大での音声学の授業で須永義雄先生からフースラーのことは聞き及んでいましたから、とても親近感と期待を抱いてレッスンに通いました。

私には留学し師事したい先生が3人いました。レコードで聴いて憧れていたのです。H. クレッチマール、K. エクヴィルツ、P. シュライアーでしたが、クレッチマールはやはりフースラーの直弟子なので一番興味がありました。僥倖にも、後に私はデットモルト音大でクレッチマール門下となりましたが、そこには先のリンデンバウムと、もう一人 H. クールマンというフースラーの直弟子の先生がいました。同じ直弟子でも3人は全くタイプが違います。リンデンバウム先生はとにかく発声指導のオンパレード、クレッチマール先生はまずは音楽作りで、歌うに不具合な時にフースラー直伝のトレーニングを施して下さいます。クールマン先生は演劇的なテキストの読み方を通じて、自然な発声スタイルを伝授して下さいました。

歌を歌うにはまず発声が第一なのでしょう。私は歌いたい気持ちを具現化するために、最初に発声の技術を何の疑念もなく弟子たちに伝えることには反対です。歌心を涵養しないで発声の技術を教えようとしている御仁が何と多いことか。我が国のように、一声楽教師が何でもかんでも全て弟子に教えるなどというシステムの危うさを早く認識し、指導の分類化を図るとともに、まずは歌心の醸成を推し進めていかねばならないと思うのは私だけではないはずです。

こう歌いたい、とは思ってもそのように歌えない！そこに発声、歌唱の技術が求められてくるのです。歌心が先か、発声が先か。哲学的な命題ではありますね。



1991年 Warburg in Deutschland での Weihnachts-Oratorium 演奏会終了後。左から、私、H.Kretschmar 先生、奥様でデットモルト音大ピアノ科教授の Renate Kretschmar=Fischer 先生、この時の指揮者で、ミュンヘン音大バイオリン教授の Christoph Poppen 先生。

◇ 竹田 数章 理事。 仙川耳鼻咽喉科医院院長  
桐朋学園音楽大学・洗足学園音楽大学臨床音声学講師

私が芸能医学に携わりたいと思ったのは、一つには、医師になる前に文化庁の能楽養成会に所属し、能楽森田流笛方寺井政教氏に師事していたからです。

能管という楽器は3尺3寸、約39cmしかありませんが、歌口が大きく、息を多く受け止めてくれるので、大きく強い音も出ますし、パワフルな楽器です。

能管は雅楽の竜笛と外観はよく似ていますが、独特の構造をしています。おそらく世界中の横笛の中で能管だけと思われるのですが、普通横笛は一本のパイプのような構造です。能管は管腔の内部に「喉」(ノド)と呼ばれるもう一本、中が狭まった管が入っています。人間の「喉頭」と同じ言葉を使うのが興味深いです。この能管にしかない「喉」のために音程が不安定になりますが、能管特有の音色を作ることができます。

管楽器の演奏時、その呼吸法や喉頭の調節の仕方は声楽の発声時とよく似ています。管楽器奏者の喉頭の調節の仕方を、喉頭ファイバーを使って観察したことがあります。声楽発声時と同じよ

うなことを行っていました。横笛はエアリード楽器なので、唇の所での抵抗感が少なく、歌の発声に近いと思われます。

また管楽器の呼吸は歌と基本的に同じです。管楽器も歌でも、演奏の時ブレス音が目立つ人がいますが、自分が研究している Atem-Tonus-Ton[呼吸一体の使い方(筋肉の張力)一音・声]呼吸法もからめて対処法を紹介します。

まず、おへその下、下腹部のあたりと、その背中側を意識します。能でも臍下丹田は演奏の時、大切な場所であると言われます。先に息を吐ききります。次に体をゆるめると反射的に、息が胸郭中の肺に流れ込んできます。これをA-T-TではAtem Reflex、呼吸の反射と呼んでいます。横隔膜は下がり、腹部は膨らみ、臍下丹田に息が入ってくる感覚になります。背中側も緩めて広げるとさらに良いでしょう。背中で息を取る感覚も生じます。腰椎に横隔膜の腱が付着していますから背中側も大切です。無理に息を吸おうとするとブレス音が目立ち、しかも効率が悪いのです。反射的に息が流れ込んでくるとブレス音は目立ちません。能では正座して演奏することが多いのですが、息を出した後、体をゆるめると臍下丹田に息が入る感覚が生じ、背中を少しゆるめ、広げるだけで息継ぎ音をほとんどさせることなく、次のフレーズに必要な息が充分入ります。そして臍下丹田から息を立ち上げていく感覚で演奏いたします。

能管、笛筒



◇ 豊田 喜代美 副会長・事務局長、声楽家  
博士（知識科学） 東京大学芸術創造研究連携機  
構「楽器としての身体：声楽の実践と科学」講師

### 『私の受けたレッスン』

最初の先生である萩谷納先生のレッスンは作品の意味や世界観が理解できていることが前提であり、厳しく徹底していた。先生のピアノ伴奏は例えようもなく美しく、演奏するといつも感動に魂が震えた。後に、それは言葉では表せない芸術の至高世界というものに導いてくださっていたのだと思っている。発声指導は『あくびのように喉を開ける』だけ。「最初は息の多い声だが、ある日突然に共鳴腔に当たるようになる。」とのこと。歌声が出なくなる困難を経験しつつ『あくび』の喉の形での発声に励んだ。徐々に低音が充実し、2年時にはM. ソプラノのデリラのアリア〈あなたの声に我心は開く〉などを歌った。3年時ムゼッタのアリアの自主練習中に突然頭頂から歌声が天に突き抜ける感覚を覚え、「喉が私に適切な開き具合になり共鳴腔に的確に当たる」と考えた。卒業時にはハイソプラノのシャモニーのリンダを歌った。萩谷先生は「M ソプラノ、ソプラノの思う方を選びなさい」と言った。

4年時からは萩谷先生の勧めで柴田睦陸先生の指導も受け喜代子先生からもレッスンを受けた。柴田先生は話し声そのまま歌声になった。必死にレッスンを受け、丹田と共鳴腔が一体に機能することの必要を学んだ。蝶々夫人のアリア他を英国BBCウエールズオーケストラと歌うことになり睦陸先生と喜代子先生お二人と一緒にレッスンして頂いた。蝶々夫人を何度も歌った喜代子先生からは可憐で芯の強い純粋な蝶々夫人が自然に表現されるまで、息づかいとフレージングを細かくご指導頂き、アリア〈ある晴れた日〉の最初の一音だけを少なくとも30回以上指導を受けた。ドイツケルン音大ではBosenius教授から、先ず、パミーナのドイツ語の発音から発声法に入る指導を受け、レッスンにディクシオンの講師も同

席していた。言葉から歌の発声に入る指導からは私の骨格に繊細に合致した発声を感じた。同時にデュッセルドルフの歌劇場ボイスコーチで、ウィーン国立歌劇場の夜の女王を歌っていたスターノ先生について。先生の歌声は透明で真っ直ぐ揺れが無く強靱。先生は丹田の筋肉の動きを手で触らせながら『共鳴の焦点である両目の間に響きのゴチックを作る』『丹田は一音一音歌う直前に働かせる』など指導された。2008年ウィーンのボイスコーチBaddi氏からは『丹田にピアノの鍵盤を作るようにハミングで音程を刻む』の教えを受け、最初の3週間は土・日も無く毎日通い、自主練習は厳禁だった。

私が受けた発声のレッスンは全て、丹田と共鳴腔が感情の喚起とリアルタイムに働き、感情がそのまま歌声に投影される発声機構を作ることで、2006年からは身体運動科学の見地が加わったトレーニングを継続している。先生方の真摯で清冽な人格に触れたことは何よりのレッスンと思っている。

ケルン音大レッスン時：左からE.Bosenius先生、ドイツ歌曲の先生、豊田



◇ 鈴木 慎一郎 理事、博士（学校教育学）  
鳥取大学准教授

教員志望であった私は、教育学部音楽科への進学を希望しておりました。大学受験の際には、名古屋音楽学校にお世話になりました。そこでは、日比野顕彦先生との出会いがあります。日比野先生は、1947（昭和22）年、東京音楽学校本科声楽部を卒業され、名古屋市立菊里高等学校教諭を退

職した後、名古屋音楽学校の事務局長に着任し、声楽のレッスンもご担当されていたにっしやいました。がんを患っていたにっしやったにもかかわらず、熱心にご指導してくださり、合格発表の報告をしまして、入院先で涙を流して喜んでくださいました。残念ながら、その数日後、他界されました。

静岡大学教育学部では、1年から3年までは、藤井京子先生に師事しました。研究室で年1回、ミュージカルやオペラの公演を行い、《サウンド・オブ・ミュージック》や《秘密の結婚》の発表が懐かしく思い出されます。この経験は、小学校教諭時代の学芸会の指導に有効でした。また、現在、大学の保育の授業で、オペレッタを行っています。活かされています。

4年では、宝福英樹先生に師事しました。宝福先生は、東京藝術大学大学院博士課程に在籍された経験もあり、声楽演奏の的確なご指導はもちろんのこと、論文の指導も丁寧にしていただきました。おかげさまで大学院に進学することができました。

愛知教育大学大学院修士課程に進学した際には、水谷俊二先生に師事しました。水谷先生からは、ドイツ歌曲をご指導していただきました。名古屋少年少女合唱団のご指導もされていたにっしやり、具体的で的確で分かりやすいレッスンでした。大学院2年目、小学校教諭を勤めながら、夜間に大学院に通学するという生活でした。5年生の学級担任を務め、多くの行事がありましたが、幸い穏やかでやさしい性格の子どもたちでしたので、喉をつぶすことなく、声楽演奏の発表も行うことができました。修士論文は、滝沢達子先生のご指導を受けました。

その後、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程へ進学しました。連合大学院でしたので、実際は岡山大学で3年間の生活を送りました。音楽教育学を専門とし、奥忍先生から博士論文のご指導をしていただきました。副指導教員として虫明眞砂子先生にもお世話になりました。

岡山大学でもオペラの公演があり、《魔笛》に少しさせていただいたことが、懐かしい思い出です。日本声楽発声学会に入会したのもこの時期です。

当時から輝いてご活躍されていたにっしやる会員ならびに理事の皆様と現在、ご一緒させていただき、大変光栄です。

---

◇ 三枝 英人 理事. 東京藝術大学音声生理学  
講師 東京女子医大八千代医療センター耳鼻咽喉科科長

『(私の思う)音声学とは何か?』

音声学を担当して10年になる。当初、以下のような相談を受け、考え込んでしまった。「私の声帯はアルトか、ソプラノか見て欲しい」、「あなたの声は暗く、硬い。舌根を下げなさいと言われたのですが」、「もっとノドを広げてと言われたのですが、逆にノドが痛くなってしまって声も悪くなった」などである。声帯をみて男性と女性、体格差などで声帯のサイズに差があることは分かるし、女性がバリトンやバスの声を出すのが難しいことは理解できる。上手な歌手の声帯振動を観察すると豊かな声帯振動をしているので、流石とも思えるが、上手だからそのように見えるのであって、声帯がこうだから歌が上手い、ソプラノ向きだとかを結論付けることは出来ない。勿論、男性であってもテノール向きだとかバリトン向きだとかは言えない。すなわち、声帯が決定要因ではないということになる。また、声が硬い、暗いとは如何なることなのか。一方、開放された明るい声というのは分かるし、公開レッスンで立ち位置や腰の構えを変えた瞬間に声が明るく、通るようになることも目撃する。問題は何か?そもそも舌根を上げた覚えが無ければ下げようも無いし、舌根を積極的に上下する筋肉は存在しない。とすれば、それ以外の要因で本人も気付かないうちに舌根が引き上がったと考えた方が良くということになる。ノドを広げよという言葉は何となく分かる気はす

るが、ノドの主部位である咽頭には収縮筋と挙筋があるのみで、拡大筋などは無い。発音する時は、例えば摩擦音である/s/では舌と口蓋を近付けて、破裂音である/k/は軟口蓋と舌背を接触させてなどノドに狭めが作られる。そのように考えるとノドを広くとは、“不必要にノドを狭くしないようにする”ということであることが分かる。ノドの痛みについて、近くの病院で”ちょっと赤いかなあ”と言われて薬を処方されるも良くなるまいという。拝見するもどこにも発赤は認めない。とすると痛みを感じている部分はノドの中ではないということになる(医者“うーん、ちょっと赤いかなあ”は要注意である)。このように身体を診察する医師でさえ良く分かっていない有様である。これではいけないということから始まり、そもそも創造的な音楽を創り、歌うのは人間のみであることから、人間とは何かということを考えなければならなくなってくる。私の中で音声学とは、人間とは何かという視点を持つべきものとなった。

\*\*\*\*\*

■編集部門委員会からのお知らせ

鈴木慎一郎 編集部門委員長

○学会誌の修正箇所

2008(平成20)年に発行された『日本声楽発声学会誌』第36号(研究誌通算40号)におきまして、下記の通り、誤植がありました。訂正してお詫び申し上げます。

正誤表

ページ	箇所	誤	正
p.5	図2 体表振動測定結果 最下段の数値	230～ 5250	230～ 250

○投稿発表について

2021(令和3)年5月発行予定の『声楽発声研究』第12号(研究誌通算53号)への投稿発表を募集しています。締切は、2020(令和2)年11月1日(日)までに本学会事務局必着になります。

「研究論文」「研究報告」の他に、「実践報告」「研究動向」「書評」「反論」もあります。詳細は、『声楽発声研究』に掲載されています。「研究発表規定」をご覧ください。投稿をお待ちしております。

編集後記

豊田喜代美

新型コロナウイルスの状況下、例会と夏季研修会が中止となりましたが、学会通信の通常通り発行が7月理事会で決まり、ここにお届けできますことを幸いに思います。学会通信のいつもの内容であった例会・夏季研修会の記録と次回の内容が掲載できません。そこで、この機会に各理事が自らの経験から会員の皆様にお伝えしたいことを内容とすることになり、9月号と3月号で全理事が執筆予定です。変更の場合もごさいます。よろしく願いいたします。ご自愛くださいますように…。

日本声楽発声学会

会長 川上勝功

副会長 佐々木正利・豊田喜代美/兼事務局長  
理事 (五十音順)

池田京子 河合孝夫 小森輝彦 齊藤祐  
三枝英人 菅英三子 鈴木慎一郎 竹田数章  
田中昌司 西浦美佐子 森井佳子

事務局 担当：佐々木徹

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4

E-mail : info@jars-voice.org

Tel・Fax : 03-6804-0626

Web サイト <http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920

加入者名：日本声楽発声学会

日本声楽発声学会 学会通信第44号

2020年(令和2年)9月1日発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：豊田喜代美